

パーソナル・ステイトメント

原 直哉

私には、兄がいました。勉強もスポーツも得意で、それでいて一切驕ることもなく、誰に対しても平等に優しく接する兄でした。私は兄を尊敬していましたし、身内の最頂目を抜きにしても、周囲からも慕われていたと思います。そんな兄は、私が小学生のころ、溺れている友人を助けて、夭逝しました。自らを犠牲にして他人を助けることに対しては、向こう見ずである、お人好しすぎるといった様々な非難があり、そういった声は実際に自分の耳にも少なからず寄せられました。しかし、私には幼心ながらどうしても兄を非難する気にはなれず、むしろ高邁で誇らしい行為とさえ思われました。私が漠然と社会正義に関心を抱くようになったのは、この頃からです。

具体的に法曹を志そうと決めたのは、大学 3 年の時です。周囲が就活に勤しみだす中、進路希望の定まっていなかった私は、様々な職業の方々からお話を伺うことにしました。多くの方が自らの仕事内容や生活水準の説明に終始される中、お会いした法曹の方々は、そうした説明にとどまらず、自分の仕事が社会とどのように接点を持っているのか、どのような社会にしていきたいか等について熱く語りかけてくる点で異彩を放っていました。そうした姿勢に魅力を感じるとともに、自らも仕事を通じて社会正義に寄与したいと思い、法曹を志すことを決めました。

司法試験に合格し、司法修習を目前に控えた現在の具体的な目標は、リーガル面のみならずビジネス面のアドバイスもできる弁護士になることです。ロースクール時代に様々な事務所のインターンを経験させていただきましたが、ビジネス面の知識まで持ち合わせている弁護士は未だ少なく、欧米等に大きく後れをとっているという話を方々で伺いました。グローバル化が進み、国際競争がさらに激化するだろう中、人口減少の進むわが国の社会が発展していくためには、弁護士の役割拡充が必須であると思います。そこで、法律の専門知識のみならず多角的な知見を持ち合わせた弁護士となり、日本社会の維持発展に貢献することが、現在の目標であり、それに向けて日々努力をしているところです。

目標としている法曹となるためには、身につけるべき知識が山ほどあり、勉学に邁進するほかありません。そこで、比較的まとまった時間の取れる司法修習生時代に、語学、会計学、経済学や経営学等の、法律以外の学問の勉強をしようと考えています。佐々木泰樹育英会様の給付型奨学金による経済的支援を受けることで、修習生活を勉学に専念可能な実りあるものとできればと思い、応募した次第です。何卒ご一考いただければ幸いです。